

〔翻 訳〕

朝鮮漢文短編小説集（Ⅰ）

致富篇（上）

梅 山 秀 幸

一、大豆の売買で巨富を得る

忠州の可興¹⁾に住む黄希叔というのは良民の子であった。

まだ少年の時分、ソウルから一万の金をもって下って来た老人に出会った。

庚戌の年（1730）は大豊年で、大豆一斗の値段がわずかに五文であった。その老人は大豆二千斗を買い、人が大勢いた中で、黄希叔を選んでこれを預けて、

「来年、再来年と凶年が続くが、軽率に売ってはならない。私が戻ってくるのを待って、これを売るのだ」

といい、姓名も名乗らずに去って行った。

あくる辛亥の年（1731）ははたして凶年で、大豆一斗が二十文になったが、その老人はやって来なかった。希叔は、隣人たちに大豆を売ってくれるよう頼まれたものの、

「あの老人がやって来なければ、わたしが勝手に売ることはできない」といって、断わった。

黄希叔の家は貧しく、飢え死にしそうなことがたびたびであったが、ついに一斗も手を付けることがなかった。

翌年の壬子の年（1732）も日照りが続き、千里の田畑が赤土のままだった。

隣人たちはまたしきりに大豆を売るようにいったが、希叔は売らなかった。家族の者がみな死に絶えようとしても、一斗も手を付けることはなかった。その老人はついにやって来なかった。

その翌年の癸丑の年（1733）。風雨が順調で、苗や麦も雲のように実をつけたが、麦はまだ刈り入れにはいたらず、飢え死にする者は枕を並べている。

近隣の村人たちが銭をかき集めてやって来て、黄希叔をなじった。

「お前は どうして こうも物分 かりが 悪い のだ。大 飢 饉 が 続 いて 穀 物 の 値 は 二 十 倍 に も な っ て い る。し かし、も う 二 十 日 も す れ ば、麦 が 食 べ ら れ る よ う に な る。こ の 時 を 失 っ て 大 豆 を 売 ら な け れ ば、ど れ だ け 損 を す る こ と か。あ の 老 人 が や っ て 来 な い の を 見 る と、す で に あ の 老 人 は 死 ん で い る の で は な い か。お 前 は す で に 死 ん だ 人 間 の た め に、凶 年 に 穀 物 を か た く 守 っ て、近 隣 の 六、七 百 戸 を 飢 え 死 に さ せ よ う と い う の か」

みな が 並 ん で 座 り、紙 に 「一 斗 の 価 は 百 文」と 書 き、六、七 百 名 が 各 々 自 己 の 名 姓 を 書 き、そ れ ぞ れ 銭 何 百 文、大 豆 何 斗 と 書 き つ け る と、斧 を と っ て 庫 の 鎖 鑑 を 叩 き 切 っ た。黄 希 叔 な す す べ を 知 ら ず、大 豆 を 出 し て、銭 を 受 け 取 っ た。一 朝 に し て 二 十 万 の 金 を 手 に 入 れ た。

「わ た し は と う と う 約 束 を 破 っ て し ま っ た。あ の 老 人 が 来 る か 来 な い か、死 ん だ か 生 き て い る か、そ の 子 が い る か い な い か な ど、わ た し の 知 ら な い こ と だ。し かし、事 は す べ か ら く 明 白 だ。も う わ た し は 貧 乏 と は い え な い」

黄 希 叔 は 田 を 買 う こ と を 考 え、凶 年 前 の 三 分 の 二 の 値 で 田 を 買 っ た。二 十 万 の 金 す べ て を そ れ に つ き 込 ん だ。

金 を 出 し て 田 を 買 い、契 約 書 を 作 成 す る と き、大 勢 の 人 を 証 人 に 立 て、名 前 の と こ ろ を 空 け た 契 約 書 を 作 り、

「私 は あ の 老 人、あ る い は あ の 老 人 の 子 が や っ て 来 る の を 待 つ こ と に し よ う」

といった。

黄希叔がその田を耕して今に四十年が経つが、その老人もその老人の子孫も姿を現さない。けだし、すでに希叔の土地といってよく、希叔は豊かに暮らし、六、七百戸をなす巨富となっている。

私²⁾はかつて先考（亡父）が「人に信義がなければ、その行実は論ずるまでもなく、財物もまた保つことができない」とおっしゃったのを聞いた。いま、黄希叔のことでいえば、空手で富をなし、ついには郷里の巨富となった。これはまさに信義があったからである。黄希叔が出会った老人もまた人を見る目があったわけである。（『書橋別集』）

- 1) 可興:忠清北道中原郡の南漢江畔に朝鮮時代の漕倉の一つとして可興倉があった。税穀を運搬する水站倉として、1465年に設置され、朝鮮時代を通して存続し、ここに収納された税穀は南漢江の水路を通過してソウルの龍山倉まで運送された。
- 2) 私:『書橋別集』の著者の安錫徹。1718～1774。本貫は順興、字は叔華、号は完陽、書橋とも。父は重観である。安重観は金昌翁の門人で、老論に属した。1752年、重観は死ぬが、そのときまで、錫徹は父親の任地に従って行って生活した。三度、科挙を受けたが落第して、その後、江原道の書橋に隠遁した。

二、順興の万石君

むかし、順興に万石君¹⁾の黄姓の老人がいた。

その隣家の婿のソんびは崔姓で、豊基の人であったが、本来は門閥の出で、文章ができた。庭試²⁾に赴くことになったが、貧しくて路資がない。舅のところに行って、隣の黄富翁から金を借りることを相談した。舅はいった。「黄富翁は天下無双の吝嗇家だ。親の祭祀にも三升の米と雑魚三匹です

ませるような人間なのだぞ。他人のために一文だって出すものか」

崔生は舅が黄富翁の富者ぶりを妬んで、大袈裟にいつているのだと思い、もう面目などどうでもいいので、みずから直接に頼んでみようと考えた。

崔生が翌朝、舅にも告げずに、黄富翁の家の門に着くと、青衣かつ蒼頭の二人の下僕が欣然と待ち迎え、舎廊に迎え入れていった。

「わが家のご主人は朝食前に狩りに出て行き、わたくしどもに、客人がいらっしゃったら、お迎えしてお世話をするように、いいつけました」

ご馳走を盛った卓が出て来て、崔生が十分に腹を満たしたころ、主人が臂に蒼い羽の鷹を乗せ、黄色い犬を連れ、五、六人の健壯な奴僕たちとともに帰って来た。恰幅がよく、ゆったりとした衣服を着て、はなはだ威厳があった。

部屋に入って来ると、客に拝礼をして、礼儀を示し、下人に尋ねた。

「客人は長く待たれたようだが、ちゃんとおもてなしはしたのだな」

下僕が、

「はい、おっしゃったとおりにおもてなしました」

と答えると、主人は崔生にどこに住んでいるのか尋ね、客は姓名を答えた。主人は、

「隣の友人の婿と対面するのが、どうしてこんなに遅れたのだろうか」といい、続けて、朝ご飯を進めたが、水陸の珍味佳肴が膳にみちみちた。崔生は膳に向って座り、主人に対して、

「世間の人びとが富者の家に対して誹謗することばはけっして信じてはならないと、今日になってわかりました」

といった。主人が、

「それはいったいどういうことか」

と尋ねるので、崔生はこのたび妻の家にやってきたわけと、昨日の舅と応酬をつぶさに語って、

「いま、ご主人の初対面である私に対する厚誼に遭い、ご馳走までいただきました。舅がご主人を貶める孟浪なことばを申しました心事ははなはだよろしくはありません」

といった。すると、主人は話しはじめた。

「あなたの舅は私の隣家の古い友人だ。だから、私の本末をだれよりも詳しく知っている。その親の祭祀にも米三升、魚三匹というのは一毫の誤りもない事実なのだ。この老人が若いころははなはだ苦勞して、末年になってやっと富を得た苦勞話をしましう。

私は早くに父母を失い、頼るところもなく、窮乏の日々を過ごしました。安東で妻を得ましたが、その妻の人となりはまじめで、家を治めるのに好都合でした。ふたりで貧乏から抜け出す相談をして、家の前の大路の脇の石ころだらけの荒蕪の野を耕し、鉄の鋤で穴を方々に掘っておき、路傍の酒幕に桶を置かせてもらって、客たちの大小便をもらい受け、それを掘っておいた穴に注ぎ入れました。妻が拾ってきた落ち穂の粃を蒔き、私がそれに土をかぶせ、数日かけて耕した田に米を植え終えました。それが実って、その秋には数十石の収穫があったのです。

夫婦は手足にマメやタコをつくって、なりわいにはげみ、その経営もうまくいったのです。それでも妻とは約束を交わし、一粒の米でも惜しんで千金のように見なし、親の祭祀に際しても、あなたの舅がいったとおりに、儉約を心がけました。そうして、万石を積み上げて、しかる後に、その財を使おうと考えていましたが、今や九千石を得て、残りの一千石はあと十年あれば達することは容易にも思われます。しかし、あるいは洪水が起こり、日照りになって、損失が生じ、あるいは予想もしない災害に見舞われてもすれば、望み通りの万石には達さないかもしれません。そこで、昨夜、私ども老夫婦は相談したのです。

『造物主は私どもに万石を貯めさせる意志はないのかも知れない。私ど

もはもうともに七十歳ではないか。生きているうちにきれいに使ってしまうなければ、一朝のうちに目を閉じて見ると、王將軍の庫の鬼神³⁾になるのを免れまい。これがどうして悔やまないでいられよう。人を応接し、援けることを、明日から始めよう。死ぬ前に富豪のふるまいをしてみようではないか』。

そこで、二人の下人を門前に立たせ、客人を招き入れ、ご馳走を用意して、不時の来客をも応接するようにしたのです。そう取り決めて最初の日に行って来たのがあなたで、あなたは実に横財数（果報者）だったのです。これで推し量ると、今回、あなたが科挙におもむけば、かならず及第するはずです。これから貴人になられる方に、年寄りが何を惜しみましょうか」
黄富翁はさっそく家政をつかさどる番頭格を呼んで命じた。

「この書房どのは隣家の某生員の娘婿だが、今まさに科挙のためにソウルに赴こうとしているのに、その路資をお持ちでない。お前はすぐに庫に行って五十両を出し、馬一頭を引いて、書房どこの旅の準備をととのえるのだ。これで、路資の心配はなくなったものの、家の妻子がひもじい思いをしていないか心配では、試験場での作文は、きっと意を尽せまい。お前は豊基近隣の舎音（土地の管理者）に標紙を書いて送り、三十石の米を運んで、書房どこの留守宅の食糧となるようにするのだ」

崔生は思いの外の好意に万々に感謝したが、黄富翁は、
「多く貯めこんで、使いもせず、それが何になるというのか。財産というのは、天からの授かりもので、集まるときは集まり、消滅するときには消滅するもので、持ち主が変わらなければ、財物は行き場を失うというもの。この家もいずれは蓬に埋もれてしまおうから、書房どのが顕達して後、もしここを通り過ぎることがあったなら、一杯の酒を注いで、私の亡魂に手向けてくださればいい」

といった。崔生が、

「このような大財産がどうして卒爾に消滅する道理がありません」
という、老人は、

「いや、速くなれば速くに廢れるというのこそ道理というものです」
といい、そうして二人は別れた。

崔生ははたして科挙に及第して、官途に就いた。崔生の妻の家も他の地方に引っ越してしまったので、再生が順興に行き来することもなくなって、荏苒として十年が経った。崔生は大いに出世して慶尚道觀察使となった。巡察する途中で順興の役人に連絡して、黄家の村で待機するように命じた。行次が黄家の村に到ると、黄富老の大きな莊園はすでに荒廢して、草が生い茂り、人跡もすっかり絶えていた。崔觀察使はおどろき悲しんで、黄富老の家の者を手を尽して探させたところ、一人の老僕が村の仏堂の堂守をしているという。役人をやってそれを呼んで来させ、黄家がにわかには敗亡してしまった事情を尋ねた。すると、堂守は答えた。

「黄富老が亡くなった後、その子の二人の兄弟には富老ほどの局量というものがなく、はなはだ拙いやり方をしたので、天が敗亡させてしまったのです。ある年、某所の農園で火が出て多くの穀物を焼くと、次の年には別の農莊の田畑に水害があつて、不幸が重なってしまいました。若旦那たちは富家に生まれ育つたものだから、田畑の某坪⁴⁾の某子号⁵⁾が某卜数⁶⁾であることなど、そもそも関心をもつたこともありません。ある日、造作なく、火災で田畑の登録文書の入つた十あまりの櫃が一片も残らず焼かれてしまうと、たとえ良田美畑が東西南北に広くあつたとしても、何を根拠に自分たちのだと主張できましようか。初喪が終わると、お兄さまはまもなく亡くなって、弟の方も村にいられなくなって、出て行かれました。噂では、今は密陽の浦辺にいて、塩づくりをして口を糊しているということです」

崔觀察使は駕籠を下りて座り、黄富翁のために弔文を作って、昔の恩の

忘れがたいこと、先見の明の確かであったことを述べ、廢墟で祭祀を挙げた後に、嗟嘆しながら、去っていった。

崔觀察使は密陽府使に書簡を送り、巡察のときに、黄塩夫を呼んでおくようにさせた。その姿を見ると、すっかり痩せこけて、顔は日焼けして真っ黒であって、あわれみを覚えざるをえない。黄富翁への旧恩を謝し、家が敗亡した理由を尋ねると、堂守のいったとおりであった。崔觀察使が同情して、

「あなたはこのように家を敗亡させてしまったが、もし資本があれば、ふたたび家を復興させることができますか」

と尋ねると、黄塩夫は、

「二度と間違うことはないでしょう」

と答えた。

崔觀察使は黄塩夫に、監営を訪ねてくるようにいうと、はたして黄塩夫は監営を訪ねて来た。崔觀察使は黄塩夫に五百金を与えた。

その後、黄氏は治産にはげんで、ふたたび中富になった。

(東稗洛誦)

- 1) 万石君：文字通り、米の収穫が一万石ある土地の所有者ということになるが、大富豪を意味することばとして使われる。
- 2) 庭試：定期的に行われる式年の科挙とは別に、国家に慶事があったときに臨時にソウルの宮廷で行われる科挙。
- 3) 王將軍の庫の鬼神：財貨に対して吝嗇でも結局は人に奪われてしまっなくななることを意味する。繆君という人が財物に貪欲で悪事を多く働いたが、結局は王將軍に殺されて財物はすべて奪われてしまったことに由来する。守錢奴をさして「王將軍の庫子」という言い方をする。『窮燈新話』の「三山福地志」という話の中にある。

- 4) 某坪：田畑の所在地を下に坪をつけて呼んだ。
- 5) 某子号：『千字文』を使って地番を表示したもの。
- 6) 某卜数：「卜」は田畑の面積の単位をいう。

三、^{おもたか}沢瀉の取引で巨富を得た妻

李永哲というのは閭巷の人である。家ははなはだ貧しかった。

その妻が、あるとき永哲に、

「男子として生きていくのに身を処する方策があるはずではありませんか。どうして手をこまねいているばかりで、何もしないのですか」

と責めると、

「手中に何もなく、どうしようもないではないか」

と答えた。妻が、

「それなら、手中に何かがあれば、やって見るというのですか」

というと、永哲は、

「金があったにしても、今はそれで利益を得る方途などない」

と答えた。妻は、

「あなたがそのような気持ちじゃ、望みもない。わたくしがやって見ます」といい、妻はその家を売って、三百両を手に入れた。そして、永哲に、

「いま、市中の薬剤の中でもっとも値の安いものは何なのか、調べて来ててください」

といった。すると、沢瀉がもっとも安く、一斤の値が二文であり、二斤買えば三文、四斤買えば五文となることがわかった。永哲がこれを調べてきて、妻にいうと、妻は十人あまりの男を募り、飯を食わせたあとに雇って、彼らを諸方の薬局に行かせ、沢瀉を買って来させた。

薬局の人たちも、沢瀉は低価であったから、難なく売り与えた。このようにして数日、沢瀉を買いあさって、ソウルでは沢瀉が足りなくなった。

さらに、数日して、今度はいつわって薬局で沢潟を買おうとさせた。すると、在庫がなかったので、値がにわか一斤が八、九文の高価になっていた。そこで逆に、沢潟を出して売ると、薬局は二、三文の利益を得るために、争ってこれを買った。

また数日が経って、薬局に行ってみようとする、六、七文の値で買うことができた。そこでまたあまねく自分のところに買い集めた。そうして、多くの薬局で不足した沢潟は高価になって、高額でもってこれを買うことができなくなった。

五、六日のあいだに、一斤が二十文になってしまったのである。また十文の値で若干を売ると、薬局は争ってこれを買納め、五、六日後にはこれを買入れた。いつも三、四日、あるいは五、六日のあいだにおいて、人を換えて送り、多く買い入れ、少なく売って、価格は日々に高騰して、ついに一斤の値が五十文に至った。

こうして、各薬局に宣言した。

「ある田舎の薬局で、いま、沢潟が緊急に必要になっていて、値の高さにかかわらず、多く買い入れようとしている」

数十両の銅を目の前にちらつかせ、真剣に沢潟を必要としている表情を見せた。全薬局には一斤の在庫もなく、銅を見て、涎を流しながら、

「この局面に、沢潟さえあれば、何倍もの利益を上げることができるのだ。どうしたものだろう」

といていた。このとき、沢潟を三、四十文の値で出すと、薬局の人びとは、沢潟の残っていたのを喜び、これを求めているという田舎の薬局に売するためにこれを買った。その後、これを求める者は実はずっぽりなくなった。そうして、初めてだまされたことに気付いたのだったが、もうどうすることもできない。

一月のあいだに数十倍の利益を得て、李永哲の妻は家に戻り、平穩に一

生を過ごしたということである。これは『史記』の「貨殖伝」にでも載せるべき話である。

四、塩の取引で巨富を得た妻の智慧

ソウルに金姓の両班がいた。彼は妻子とともに物乞いをしながら流れ歩き、南陽にたどりついて、山のふもとに蝸の殻のような小屋を造って住むようになった。金の長男は三十歳にもなっていたが、まだ結婚もせず、その弟とともに、日が昇ると食糧を求めて出かけ、帰って来ると、年老いた母がそれを炊いだ。

その下方の村に、張風憲という者が住んでいた。この地方の常民であった。これもまた金氏に劣らず貧しかったが、適齢期の娘がいた。

ある日、金氏の息子が父にいった。

「母親も今や年老いて、朝夕の煮炊きをなさるのも困難です。私はまだ人となっているとはいえませんが、私のような老チョンガはどうすればいいでしょう。すぐにでも妻を求めるのがよくはないでしょうか」

その父が答えた。

「私がどうしてお前が結婚するのに反対しよう。だが、どだいわが家のような貧しい家に嫁をくれる者がいようか」

「下の村の張風憲に適齢の娘がいます。私はこの娘に会って求婚しようと思います」

「私どもは困窮してまさに死のうかという状況だ。平民と結婚するのは、なんとも困難なことではあるまいか」

「お父さんのことばははなはだ迂闊です。わたくしどもがこの状況に至って、まさに『朝に虎が出れば。坊主か犬か、択びようもない』というではないですか」

ついに金チョンガーは父親の弊衣と色あせた冠を身につけて、張風憲の

家を訪ねた。

「私は申し上げたいことがあって、やって来ました」

と、金チョンガーがいうと、張氏が、

「いったいどのようなことでしょうか」

と尋ねる。そこで、金チョンガーは話した。

「大人はきっとわが家の門地をお聞きおよびでしょう。これでも両班の身分なのですが、私はいまだに結婚していません。大人の娘御を妻に迎えたいのですが、いかがでしょうか。天は人それぞれに持ち分を与えますが、貧もまた貧なりに生きる術があるのではないのでしょうか」

「私の娘が君の家に嫁げば、飢え死にするのが目に見えている。君はどうしてそんな馬鹿げたことを言いに来たのか」

張風憲は手を振って追い返した。金チョンガーは為すすべもない。

張氏は家の中に入ると、ため息をついて、独り言を言った。

「何ともとんでもない話だ」

娘は台所で米をといでいたが、出て来て、尋ねた。

「お父さまは何をぶつぶついつてらっしゃるのですか」

張氏が、

「お前が知らないでもいいことだ」

といっても、娘が再三尋ねるので、父親はやっとのことで、

「上の村の金都令がわが家と婚姻を結びたいとやってきたのだ。私はこれを断ったが、なんとも馬鹿げた話しではないか」

という、娘はいった。

「わが家の内房に迎え入れる婿は、せいぜい常民の銃を担ぐ軍人くらいしか望めません。しかし、金都令はあくまで両班と云う名跡を帯びています。それだけでもどうして婿がねとして劣っているのでしょうか。貧富と死生はそれぞれに定まった福があるだけのこと。金氏の求婚をどうして忌む

ことがありますでしょうか」

張氏が、

「お前の意向がそのようであれば、そのまま従って、何の不都合があるうか」

というと、娘はいった。

「金都令は朝ご飯を食べていらっしやらないかもしれません。わが家の朝ご飯がすでに鼎にできあがっています。呼び戻してお腹を満たしてさしあげ、また結婚を承諾してお送りするのがよろしいでしょう」

張風憲は垣根の外に出て金チョンガーを手招きして呼ぶと、金チョンガーは戻って来て、部屋の中に座った。風憲がいった。

「二人のたがいに貧しい人間が相い会って、はなはだ苦勞するに違いないが、私は君のことばを良しとして、婚姻を結ぼうではないか」

金チョンガーは、

「大人はよく思案なさってくださいました」

といて、さっそく五本の指を折って、生気があふれて福德に富んだ日を占うと、明後日が吉日であった。風憲が、

「それはあまりに急で、婚姻の用意が間に合わない」

といったが、金チョンガーは、

「互いに赤貧の身の上で、当初からふわふわした布団や枕が欲しいとは思っていません。どうして期日を延ばす必要がありますでしょうか。男女が枕を一つにする、それがすなわち婚礼になります」

といった。風憲も、

「それもそうにはちがいない」

といった。

金チョンガーは朝ご飯を食べ終えて、家に帰ると、その父親が、

「張風憲の答えはどうだった」

と尋ねるので、

「明後日に婚姻の日を定めました」

と答えた。父もまた、

「あまりに急で用意ができないではないか」

といったが、金チョンガーは、

「期日を延ばしたところで、どこで緋緞のきらびやかな衣装や鞍を着けた馬を用意できるというのでしょうか。父上の着古した衣装と冠があれば、それだけで十分です」

と答えた。

張氏の家で三々九度を行い、二人で枕を交わすと、夜中、新婦は、

「あなたのお母さまはすでに年老いて、朝夕の炊事はたいへんなご苦労でしょう。いま、わたくしがあなたの妻となったからには、一日でも早くお義母さまに代わって、婦道を修めたいと思います。お願いですから、明日の朝早く、お家にいっしょに連れて帰ってください」

といい、夜が明けると、父に、

「わたくしが嫁いで行くにあたって、あちらに何ももっていくものはありません。そこで、早くあちらに行って、お義母さまのご苦労に代わりたいと思います。これは一日でもゆるがせにできません。いま、新郎とともに出かけます。長いあいだ、お世話になりました」

といて、大きな櫛と小さな櫛の二つを懐中に入れ、柳の行李を頭に載せて、新郎の後について行った。金氏の蝸屋の前に至ると、新郎が先に家の中に入って行き、その父母に、

「ただいま、新婦を連れて帰ってまいりました」

と告げ、新婦を呼び入れた。新婦は入っていき、舅と姑に拝礼をすると、そのまま厨に向かい、さっそく炊事を始めた。

金氏兄弟は物乞いに出かけて、帰ってくる。新妻は物乞いで得たものを

もって炊事する。ある日、妻は夫に向かっていった。

「あなたは大丈夫として、生計を立てることを考えずに、ただ物乞いをして回っているだけ。どうしてこのままでいいわけがありません」

夫はそれに対し、

「これまで鋤で田畑を耕すことを学ばなかったし、樵や家畜を飼うことも学ばなかった。物乞い以外に、わたしに何ができるというのか」

と答えたが、すると、妻は楊行李から木綿の二疋を取り出した。糸筋が細かく、緋緞と見分けがつかない。これは妻が実家にいるときにみずから織ったものであった。

「市場に行って、うまく売れば、それぞれ二十両には売れるでしょう。十両の金で綿花と米を買い、残りの金をもって帰ってきてください」

夫は妻のことは通りに売って、四十両を得て、綿花と米を買い、残りの金は三十両であった。

一家は大喜びだった。米でご飯を炊いで食べ、綿花で布を織った。そして、三十両を夫に与えていった。

「製塩場に行って、塩造りと約束するのです。『この金を製塩場に預けるから、三年のあいだ、塩を自由に受け取り、それを売って商売をしたい、三年経った時点で、この金は返してもらわなくともよい』と。そういえば、塩造りはまちがいなく、喜んで承諾するでしょう。あなたは塩を背負って、百里の地域をあまねくまわって売るのはです。その値はその場でしっかりと受け取る必要はありません。掛け金を残して置き、人情を示して、お得意客をつくるのです。そうすれば、かならず利得は多くなるはずですよ」

夫は妻に言われるままに塩造りのところに行き、約定を交わした。はたして塩造りは目の前の三十両が少なくはないことに目を晦まされ、三年ものあいだ、小さなものも積み上げれば莫大になることを理解しなかった。三年のあいだ、利子として塩をあてがい、期限が来れば、元銭も返そうといっ

たが、金氏は元銭は返してもらわなくともよいときっぱりといった。

その翌日から、毎日、金氏は塩を背負って数個の村をまわり、あるいは現金で売り、あるいは掛け売りをして、行くところ行くところ、人びとなじみになり、他の塩商人がやって来ても、人びとは金書房の塩を待っているのだといって、断わるのだった。

そうして、三年となった。妻は夫にいった。

「この三年のあいだ、商いをして、掛け金をふくめて、すべていくらになりますか」

「すべて三千両になる」

妻はふたたび三十両を持ち出してきていった。

「これをもって、ふたたび塩場に行き、以前と同じように約定を交わしてください。今回は兄弟二人分の塩をもって行こうとしても、塩造りは拒むことはないでしょう」

金氏は塩造りのところに行って、妻のことは通りに頼み込むと、塩造りたちは、

「あなたは前に最後まで元金は受け取ろうとせず、きわめて清廉であった。これから、二人分、塩をもっていったところで、なんの差しさわりがあろう」

といったので、金氏は弟とともに毎日塩の荷を背負って、以前と同じくあまねく売り歩いた。

一年が経った。金氏は妻に頼んだ。

「四年のあいだ、塩の荷を背負っているが、背骨が圧迫されて痛くてしかたがない。馬に積んで行きたいのだが」

妻は、

「馬の背に積めば、馬に要する費用の分、利益が少なくなりますが、背負うのがそんなに苦勞なら、馬を使うのもいいでしょう」

といい、十兩ばかりを与えたので、金氏はその金で一頭の牝馬を買い、その馬に塩を積んだ。その馬が塩を積み、後には弟が塩を背負い、界限を歩き来したが、しばらくすると、その馬が仔馬を孕んだ。

ある日、商売に出て行くとき、妻は、

「今日は、塩を売って帰って来る道で、馬はわが家に帰してください。製塩場に行って、明日の分の塩はあなたたちが背負ってくるのです」といったので、途中で馬を家に帰した。その日、馬は仔馬を産んだが、これがまことに名馬であった。

そうこうして、塩販売の約定の三年が過ぎた。その妻が機織りで貯めた金も千両ほどになり、塩の商売で得た金を合わせれば、万金にも上った。今や厳然として近隣の邑の巨富である。

仔馬も五、六歳となり、飛虎のように素晴らしく、地を払って空中を駆けるようであり、高い値で売れそうであった。特に洞内の武弁の李先達がこの馬を欲しがった。ソウルに上京するのに、乗りたかったのである。李先達は馬を金氏の家の前にある自分の早稲の水田三マチギと交換したいと考えていた。

妻はその話を聞くと、夫に李先達を招いて来させ、直接に売買を行うことにした。李先達がやって来ると、妻は扉を隔ててことばを交わした。

「先達はほんとうにわが家の馬をお買いになりたいのですか」

「その通りです」

金氏の妻はいった。

「ここから見える陸田の三日耕（マチギ）が先達の所有だと聞いていますが、あれと交換するのでは、いかがでしょうか」

李先達は、

「あの土地は棄てたも同然の物件です。それにどうしてあえて値をつけて、人の駿馬を求めることができます。できれば、以前、交換しよう

とした早稲の水田を加えることにしましょう」

といった。しかし、妻はかたくこれを断って、陸田だけを求めた。そうして、文書を作成して、名馬と陸田とを交換した。

数日すると、家を建てるための材木を求め、その交換した場所に立派な家を建てた。その家に引っ越して、長寿と富裕、そして多くの孫子に恵まれて過ごした。けだし、それは縁起のいい土地であったのであろう。金氏の妻はそれを知っていたのである。 (『東稗洛誦』)

五、江景浦の活況

ソウルに親の残した財産で生きている人物がいた。彼は金を人に貸しては利子を得て、いまだかつて彼自身が産業や交易を行ったことがなかった。それを誇っている人がいた。

「君は大丈夫として十万銭をもって、はるかな都会の地に出かけ、大きな利益を得ようとは思わないのか」

その人が聞き返した。

「はるかな都会の地というのはどこをいうのだね」

「まずは松都（開城）、それから平壤、義州、東萊、元山浦、咸興、全州、そして江景浦といったところさね」

その人の田庄がたまたま湖西（忠清道）にあったので、数十万銭を六頭の馬に積んで、江景浦に出かけて行った。

まさに春から夏に変わる時節で、魚や蝦が掬いとれるほど豊かで、漁船の帆柱が林立している。人馬が雲のように集い、煙の立のぼる家々はまるで蜂の巣のように騒がしい。

彼は目を奪われ、心も上の空、さてどこに行ったらいいものやら、わからない。しばらく馬に江辺の草を食べさせようとして、自分は頬杖をついて座っていた。このとき、弊衣破帽の男が足を引きずりながらやって来て

横に座った。その人がやって来た男に、

「あなたはどこの人か」

「私はこの江景浦の人間だが」

「私は江景は大都会だと聞き、それで金を積んでやって来た。しかし、誰を頼ったものやら、何を交易したらよいのやら、まったくわからない。さて、どうしたらいいのだろう」

足の不自由な男は、

「わが家は貧乏だが、あなたの居所とすればいい。交易については人びとの競争のないものを考えればいい」

といい、その人は、

「それなら、私はあなたの家に厄介になろう。そして、あなたに金を預けるので、あなたの思いのままに活用して欲しい」

といい、馬に積んだ十万銭を足の不自由な男に任せ、その小さな家に到着した。家といっても門もなく、馬をつなぐ場所もない。

その人はこの家で一晚を過ごしたが、とても居続けることはできず、朝になって起きると、いった。

「金はあなたの手の中にあるが、私はこれには関与すまい」

足の不自由な男が、

「このような末世にどうして人を信じ、どうしてこの家にやって来て、事の成り行きを見極めようとししないのか」

と尋ねると、その人は、

「あなたが私をだまさなければ、私が入って、何の問題があろう。あなたが私をだますつもりなら、私がここに留まっても何の利益があろう」

といい、馬に鞭打って立ち去ろうとした。足の不自由な男は追いかけて馬に取りすがり、

「またいつここに来なさるか」

と尋ねると、その人は、

「私はこれまでソウルの門を出たことがなかった。今日、ここまでやって来たのが不思議なくらいだ。私は何をするためにふたたびここにやって来るというのだ」

と答えた。足の不自由な男が、

「あなたの名前は何で、そしてソウルの何坊の何曲の何街に住んでいるのか」

と尋ねるので、その人はこれにつぶさに答えた上で、

「君はソウルに来ようというのか。その足では大変だろう」

というと、足の不自由な男は、

「来るなどいっても、どうして行かないでいられよう」

といった。

その人がソウルに立ち帰った後、一文字の消息もなかった。

足の不自由な男は、万人が争うように商うのは水産物であり、煙草と茶はいやしめられて、売れ残って積み上げられているのを見て、十万銭をすべてはたいて煙草と茶を買い占め、固く袋に入れて封をして、雨の漏らない家に預けた。その預けた家は百にも上った。その明くる年、煙草と茶の値が騰貴して、その値は十倍にもなったので、百万銭を手に入れた。足の不自由な男はその内の二十万銭を残して、八十万銭を用いて田畑を買い、家を建て、奴婢と牛馬を置いて、にわかには富豪となった。

足の不自由な男はソウルに上って、その人を訪ねた。その人は急な訪問に驚いて、

「いったい何をしに来たのですか」

と尋ねると、足の不自由な男は、

「あなたのお金を利用して、一年で十倍にしました。あなたの前に元銭と利益の十万銭をお返しすることとし、残りの八十万銭で、私はこのよう

に富豪の身の上になりました。あなたを訪ねて、それを告げずにはいられなかったのです。これから、私と同行を願えないでしょうか。私の富裕のありさまを御覧になって欲しいのです。そして、あなたの二十万銭で南方の水産物を買って船に載せて運び、あなたは陸路でソウルに運んでこれを売りさばけば、また十倍の利益を得ることができます」

といった。その人はいった。

「当初、私はあなたを信用してお金を預けたわけではなかった。それまで知らなかった産業の繁華な都会に行き、目がくらんで病気になりそうで、どうせ私のこと、すぐに十万銭をなくすだろうと思ったので、それで、あなたに任せただけです。あなたはそれで富裕になられたが、元銭が返って来ようとは夢にも思っていないでした。倍の利益をどうして望みましよう。あなたがお帰りになるとき、私に銭を残そうとお考えなら、ただ元銭だけにしてください」

足の不自由な男は、

「いま、あなたが私と同行なされば、道中の寝食もわが家での起居も、前回のような苦労は一切なく、ソウルにいらっしゃるとなんなら違いありません」

というので、その人は、

「それなら、行きましよう」

と同意した。

はたして、道中の寝食ははなはだ安楽であったが、これは足の不自由な人があらかじめ周旋しておいたからであった。

その人は足の不自由な人が招待した住宅とその豊かな生活を見て、大いにおどろき喜んで、嘆賞しながら、ただ元銭だけを返してもらって、陸路を取って帰って来た。その人はいった。

「私は元銭を失うことなく、一家族の命を救済した。私の得たところは

少なくない。どうしてその上の利益を望むことがあろうか」

(書橋別集 漫録)

六、奪われた煙草を奪い返した煙草商人

英祖¹⁾の戊寅の年(1758)、ソウルでは煙草の値段が高騰して、一包みの値段が三分もした。そのとき、漆原の煙草商人が家や田畑をことごとく売り払って五百両を手にし、それでもって煙草三駄を仕入れた。江を渡ろうとして日が暮れ、岩蔭で休んでいると、そこに蓬髪の老人がいた。老人が尋ねた。

「馬が積んでいるのは煙草ではないのか」

「そうだが、それがどうした」

と答えると、老人は、

「今は煙草が不足していて、三駄もあれば三千両を手にすることができよう。あなたはいいところに眼をつけたものだ」

といった。煙草商人がそれに対して、

「私は初めてソウルに行くので、誰も知った人がいない。どうやって商売すればいいかもわからない。私にどうすればいいか教えてもらえないだろうか」

というと、老人は、

「それなら、あなたは初めてのソウルに、こんな貴重な品物を持って出て来たのか。もし私に出会わなければ、どれほど狼狽するような目に遭ったことだろう。わかった。私について来るがいい」

といって、二人はともにソウルの城内に入っていった。城内の路地を歩き回って、鐘路の鐘の鳴るころには老人の家に着いた。あれこれと世話をし、その日は休んだ後、翌朝の鐘が鳴ると、奥の方から老人が出て来て、

「あなたが持っている煙草は少量とはいえない。一日や二日で売りつく

せる量ではない。煙草の荷はここに置いて、あなたの馬はおとなしくて大丈夫なようなので他に預けることにしよう。ちょうど私のところに柴を売りに来る者が龍山湖にいるから、そこに預けて置けばいいと思うのだが、どうであろうか。あなたは朝飯を食べ終えたら、すぐに馬を牽いてそこに行くがいい」

といった。煙草商人が、

「それはいいと思うが、私は龍山湖とやらにどう行けばいいのか知らない。どうすればいいだろう」

というと、老人は、

「わが家の奴が道はよく知っているので、いっしょに行くといい」といった。馬に飼い葉をやった後、その家の奴とともに家を出たが、まだ暁の鐘も鳴る前で、遠くの人を見分けられないほどの暗い時刻である。青灑²⁾に着くと、奴が逃亡してしまった。煙草商人は奴を探そうにも、どこに行ったのか見当もつかない。ソウルの老人のところへ帰ろうとしても、夜中にたどり着いた家への道をどうして記憶していよう。日はすでに長けて明るくなったものの、どうすればいいかわからず、馬の轡を取ってすっかり途方に暮れ、大きなため息をつきながら道をとぼとぼと行った。往来する人びとがいったい何があったのか尋ねて、その理由を聞くと同情しない人はいなかった。

すると、甕の笠をかぶった屈強の人が半ば酒に酔って、歌謡を口ずさみながら、ゆるゆると通り過ぎた。煙草商人の様子を見て、

「いったい何を嘆いているのだ」

と尋ねたので、煙草商人は事の顛末を詳細に語った。甕の笠の人はこれを聞き終えると、笑って、

「あなたの失ったものはことごとく取り戻してみせよう。その煙草の値の半分を私にくれるか」

といった。煙草商人は勇躍して、

「もしすべてを取り戻すことができれば、その値のすべてをあなたに与えても、少しも惜しくはないくらいだ」

と答えた。氈笠の旅人は煙草商人にあれこれと指図して、まず三匹の馬のうち最も年老いた馬の轡を放って駆けさせた。煙草商人と旅人は三頭の馬の後を付けて行ったが、馬はソウル城中をぐるぐると回って、ある家の門まで行くと急に立ち止まった。氈笠の旅人が、

「これがその家ではあるまいか」

というと、煙草商人はしばらくじっと見ていて、

「たしかにこの家です」

と答えた。氈笠の旅人は門を蹴破って、大声で主人を呼んだ。主人が奥の方から出て来て、氈笠の人は煙草商人の方を振り返って、

「これがあなたの昨日宿った家の主人に違いないか」

と尋ねた。煙草商人が、

「そう、そうこの老人だ」

と答えると、家の主人は煙草商人を見ながら、

「あなたはいったいどこに行っていたのですか。わが家の奴は先ほど帰って来て、まだ道が暗くてあなたを見失ったとっていました。ずいぶん心配していたのです。やっと帰って来られた。よかった、よかった」

といった。氈笠の旅人は老人を叱りつけて、

「お前はいったい何者だ。某さまのお館に届けるために運んで来た煙草を、お前は奪おうとして、馬とともにこの者を追い払おうとしたのだな。まず奪ったのと同じ量の煙草をもって来い」

といった。氈笠の旅人の態度は堂々として、言辞も明朗で澁みがない。老主人はそのことばを聞いて茫然として、口の挟みようもない。三駄の煙草をことごとく運び出すと、氈笠の人はみずから包みを縛った紐をほどきな

がら、

「この中にあったはずの三百両の金はどこに行ったのだ」

といった。老主人は煙草商人を振り返りながら、

「あなたがこの煙草をここに運び入れたとき、三百両の金のはなしは聞かなかつたが、今になって、初めて金の話が出て来た。それに紐など私はほどいてもいない。こんな出鱈目な話があるのか」

といったが、煙草商人はこれに対して、

「昨日はもちろん、そんな金の話はしなかつた。私は実は某さまの庄園の人間で、某さまの庄園でできた煙草と三百両を納めるためにソウルまで上つて来たのだ。あの金がなくなつてしまった。老主人のせいだ。さてどうしたものやら」

といった。甌笠の旅人が大きな声で、

「私はその某さまの屋敷の奴の子なのだ。長いあいだ煙草の荷を待っていたのだが、なかなか来ないので、城門を出て待っていたのだ。たまたま道で遭うことができて、この家にまで導いて来られた。もし老主人が金のことは知らないというのなら、こちらにも覚悟はある。さて、老人の身で堪えられるかな」

といて、肩を怒らせ肘を張り、眼を怒らせたが、その氣勢には怯え上がるばかりである。老主人というのはもともと市井の常賤の人間に過ぎない。三百両の金など身には覚えがないものの、くすめたといわれたら、申し開きのしようもない。公に訴えられでもしたなら、どのような罰を受けることになるか、考えるだけでも恐ろしい。そこで、三百両の金を何とか工面して差し出すことにした。

甌笠の旅人は煙草商人に煙草の積み荷をことごとく運び出させ、自分の家に積んで置いて、その値段のさらに上がるのを待って売りはらい、三千両あまりを得た。煙草商人はその利益の半分を差し上げようといったが、

氈笠の旅人は笑いながら、

「私は詭弁を弄して三百両を手に入れた。それだけで十分だ。これ以上、何を望もうか。もうこのことは何もいわないでほしい」

といて、ついに受け取らなかった。

当時、この話を聞いて、感心しない人はいなかった。

(『青邱野談』)

- 1) 英祖:朝鮮二十一代の王。在位 1724～1776 諱は昡,字は光叔。肅宗の第四子。1721年、世弟に冊封、即位すると、党争の弊害をなくすために臣下たちを厳重に戒めるとともに、官職への起用にバランスが取れるように努めた。これを蕩平策といった。節税と儉約に努め、奢侈を禁じた。農事を奨励し、税制を改革し、均役法を確立、軍備を整えるなど、長い在位期間、善政を敷いたといえるが、思悼世子の心神の障害があって、これを米櫃に入れて殺すといった悲劇があった。
- 2) 青瀾:現在の龍山郡にあった地名。

七、巨余の客店

金基淵というのは慶州の人である。家は富裕であったが、はやくに父親をなくし、寡婦となった母のもとで育った。

長ずるにおよんで、弓術をみがき、武科に及第しようと、愚かな考えを起こし、権臣・倖臣に賄賂を納めれば容易に官途が開けるだろうと、母親をだまして千緡の金を懐に入れて、ソウルに上った。宿を決めて、賄賂を使って職を得ようとするものの、なかなかつてを得ることができない。日々権門の下僕たちと飲酒し、賭博にふけり、一年もしない内に有り金すべてを使い果たして、家に帰った。

ふたたび母親をだまして、

「某公、某卿など、みな私の知り合いになりました。今回ふたたび、千緡の金をもって行けば、郡・県の役人か、水使か兵使にはなれましょう」

母親はそのことばを信じ、土地や家財を売って金をつくって渡した。金武弁はふたたび上京したが、またもや一年も経たずに使い果たしてしまった。故郷に帰る面目もない。ソウルに居残ったまま、人を遣って、家に金を送るように督促して、あたかも明日から仕事を始めてどこかに赴任するかのように取り繕った。母親はぼんやりとして、それが虚言だとは気づかない。いわれるままに、金をこしらえて送ることが、すでに数度に及んだ。

ある日、基淵のもとに家から知らせが来て、土地と家と奴婢をすべて売り払ったとしても、借財が山のようにあって、母と妻子は今や隣の家の行廊に身を寄せて暮らしているということであった。基淵はこれを知って愕然として、花札を投げ捨て、ため息をついた。

「これは何ともぶざまなことだ。ソウルに来て遊びほうけて十年、卿相の顔がどのようなか知らず、空然と年老いた母をだまし続けて、わが家の財産を蕩尽してしまった」

荷物を調べてみると、七、八十緡だけが残っていた。喟然としてため息をついていった。

「これだけではソウルでは数日の費用に過ぎないが、郷里の家に帰れば、数ヶ月は老母を養うことができよう」

いっしょに遊んだ博徒たちに手を挙げて別れを告げ、下人と馬を急ぎ立てた。城門を出て漢江を渡り、正午には巨余¹⁾の客店に馬を止めた。

そのときは凶年が重なり、時候もはなはだ寒かった。客店の前の道端に餓えた女が破れた衣服で肌も露わにして、赤ん坊を抱いて身をすくめていた。

基淵は昼食を摂ろうとしていたが、これを見て、

「あそこにいる女人をちょっとこちらに呼び入れてくれまいか」

という、その女は振り返って、いざり寄って客店に入って来て蹲るようにして座った。基淵は膳を女にすすめ、二緡の金を与えていった。

「ことわざに『服を整えて乞えば得ることができるが、裸で乞うても得ることはできない』というではないか。この金で安価なチマ・チョゴリでも買って、物乞いでもするがよい」

そして、客店の主人を振り返り、

「人が死のうとしているの見ても、救おうとはしないのか」

と叱りつけて、馬に乗って立ち去ろうとした。女人は感泣して、追いかけて、尋ねた。

「ナウリ（旦那さま）はどこの方でしょうか」

「私はナウリなどではない。慶州の金先達²⁾だ」

「いつまたお会いできでしょうか」

「わたしは今回故郷に帰れば、二度とソウルに上ることはない。どうしてまた会うことなどあろうか」

基淵はそういうと、馬に鞭を当てて後ろを振り返ることなく立ち去った。

客店の主人は行旅の人がこのように女乞食を救済するのを見て、女乞食を振り返り、

「私はお前に衣服を与えるから、お前は私を助けて、台所に立ち、米を炊ぎ、皿洗いでもしてくれまいか」

といった。女は承諾した。

数日して、山東（江原道）の煙草商人が煙草五十把を背負ってやって来た。客店の主人は女人にその値を尋ねさせた。

「その煙草はいくらでお売りになりますか」

「二緡もらえば、これを置いて行こう」

女人はこれを聞いて、

「先だって、金先達がいただいたのが、ちょうど二緡で、さいわいにま

だ手を付けていない。その煙草をわたくしに売ってください」

といて、煙草を手に入れた。

五ヶ月のあいだに、煙草の値段が騰貴して、五十把を売って、二十緡の錢を受け取った。女は客店の空いた一角に野菜・果実・生姜・大蒜・梔子・藍・靈芝・明礬などを置いて、てきぱきと売りさばいた。その冬になると、倍の利益を得て、金が増えるに従い、店舗もさらに広げた。草鞋・麻靴・紙・明紬・緋緞なども取引できるようになり、餅や清酒・濁酒など飲食物も売った。

十年のあいだ、豊年が続き、世間も泰平であった。王さまの陵墓への駕行に風流舞が街路をうずめ、勢道家への進上物を積んだ馬匹がしきりに往来し、春秋の科挙にソンビたちがあらずってソウルに上り、わが国の人物たちが盛んに振るった時節であった。このとき、ソウル近隣の客店は毎日、十倍、百倍の利益を得たものであった。

この女人も多くの金を稼いで、万兩に至った。子どもも今や身の丈が五尺の少年となった。客店の横に大きな家を買ひ、簾を下ろして、店に座り、揚波飛白して（酒を売って）、なに不足なく生活していた。

楊州・広州の酔徒たちが、この女人が大金持ちの寡婦であると聞いて、これと結婚していっしょに住みたいものと、客店の主人に持ち掛けたが、女人はいった。

「私はもともと某郡の良家の娘で、良家に嫁いなのですが、飢饉に遭って夫は死んでしまいました。幸いに一児があり、この子を抱えて物乞いをしていたのです。もう凍えて飢え死にし、崖から転落しようかというときに、思いがけず、生き仏に出遭い、食事にありついたらばかりでなく、お金までいただいたのです。それで飢え死にを免れ、いただいたお金を元手に財を増やすことができ、母と子は相寄りかかり、今まで生きて来ることができましたのです。これはすべて金先達という生き仏のおかげです。その方のご恩を受けながら、わたくしはどうして他の方と結婚などできましょう。金

先達が来られたら、わたくしは金先達とご一緒します。来られなかったら、このまま死ぬだけです」

男たちはすごすごと帰って行った。

女人は心の中で、もし長くこのままここにいれば、きっと乱暴な目に遭うにちがいないと考えた。それで、この家を処分することにし、財産をかき集めて、崇礼門の外に家をもって移り住んで、金先達の到来を待ち望んだ。

それから三、四年が経ち、丙辰の年（哲宗7年、1856）の春、宗近洙³⁾が尤庵⁴⁾の孫であるという理由から蔭塗⁵⁾で官職に就き、慶州の府尹となった。その新延の下人⁶⁾が城門の中の何軒目かの家に泊まった。

女人はその子を新延の下人が泊まっている客舎に行かせ、慶州の首尊⁷⁾を招待しようとした。慶州の首尊はいった。

「お前の母親はいったい誰なのか。わたしは今、支仗錢⁸⁾二百緡を用立てるのに急であり、お前の母親の招きに応じることは難しい」

息子はいった。

「まずはいらっしゃってください。二百緡はこちらでご用意できましよう」

首尊は童一人を連れて、少年についてその家を訪ねた。内外に垂らした簾がはなはだ美しい。女人は首尊がやって来たのを見て、出迎え、家に招き入れて、酒と肴で応接した。女人は尋ねた。

「首尊の府に金先達という方がいるのを、ご存知ないでしょうか」

「姓が金で、先達を称する人はただ一人ではなく、三、四人はいよう。夫人はどの金先達をいつているのか、わかりませんが」

「わたくしもまた、その名も、号も存じませんが、顔に特徴がありました。左の頬に桜桃のような痣がありました」

首尊が童を振り返って。

「お前は知っているか。客舎の東の夾房に履を売って生活している両班がまさにその人だ」

という、童は、

「どうしてその人がこの先達だというのですか」

という。主尊は、

「お前はあの先達の経歴を知らないのだ。十年前のことだ。ある竹杖をついた服喪の人が物乞いに来て、家が貧しくて、葬式を行うことができないというので、わたしが金を何緡かと食糧を与えて助けたことがあった。そして三年が過ぎて喪を終え、喪服を脱ぎ、タンゴンを付け、後坼⁹⁾を着て、ふたたび訪ねてきて、そのときはじめて、彼が先達であることがわかった。人として脈がなく、しまりが無いので、乞食をして歩き回っていたのだが、衣服もしいにボロボロになり、見るたびに、身なりがひどくなっていった。ついには夫妻が身体に藁をまとって歩いていた。わたしはそれを見て、あまりに気の毒になり、『あなたの内外は身体は壮健で、四肢も不自由ではない。どうして奮発して、履を作るなり、紡績をするなり、井戸を掘るなりしないで、瓢を下げてただただ乞食をして回るのか。一、二度はやむを得ないにしても、いつもその姿を見ていると、わたしもうんざりしないではいられない』

といったのだ。すると、その人も大いに反省して、わたしに一束の藁を請うたのだ。わたしもその意志を理解してこれを了承して一束の藁をあたえたのだが、数日すると。その人は藁履をもってやって来た。五、六文にはなるであろう。一日に三、四足はできるであろう。その妻も隣の家の針仕事や白搗きなどをして、子女を連れて客舎の一隅に身を寄せ、なんとか暮らしている。

ところで、夫人はどんな事情があつて、金先達のことを尋ねたのですか」

女人は話を聞くと、涙をこらえることができなかった。

「どうしてこんなことがあるのでしょうか。わたくしはいま、支杖銭の二百緡を用立ていたしますが、これはわたくしに返すのではなく、金先達の方にお渡しください」

そういって、文箱から一幅の書簡紙を取り出し、ハンゲルで金先達宛てに手紙を書いた。その文意はけだし次のようなものであった。

某年、巨余洞の客店で飢えと寒さで死のうとしていたとき、食事とお金で助けてもらったこと、その金で煙草を買って店を開いて利益を得たこと、十年のあいだ財産を築いて万金になったこと、酔徒たちが店の主人とはかって自分と結婚しようとしたが、恩人を忘れて他の人のもとは行けなと断ったこと、崇礼門の外に引っ越して、毎日のように金先達が来ないかと待っている云々。

いちいちを事細かに書いて、一幅に情があふれ、末尾には次のように記した。

「人を生かそうというときは、おおよそどのような仁心からでしょうか。人を忘れるときは、これはまたどんな薄情からでしょうか。いま聞くところ、先達は多年の苦労を重ね、家もなく露宿をなさっている、これはまたどういうことでしょう。いま、若干の物をお送ります。まずはご婦人とお子を救い、すぐに上京してください」

首尊たちが新任の府尹とともに帰って行くと、すぐに金を用意して基淵に渡し、

「あなたのソウルの縁故の者からの金です。お受け取りください」といい、袖の中から書簡を取り出した。そのとき、夕闇が迫って、文字を読むことができなかった。

錢袋を部屋の中において、つくづくと考え込むのだった。

「私の金を貪った人たちは多かったが、いったい誰が私の過去を記憶しているだろうか」

隣の家に油を借りて燈を点け、手紙を見ると、すなわち、巨余の二緡の功德塔ともいうべきである。読むこと半ば、感激のあまり、夫婦は向かい合って涙を流した。先達は胸を撫でてため息をついた。

「ソウルで使い果たして、前後、四千貫の金は何の跡形もなく消えた。ただこの二緡の金だけが跡を残すことができた」

そして、妻に向かっていった。

「百緡の金はこれまでの苦労を考え、米を買い、肉を買って、子どもたちとともに腹いっぱい食べるがよい。残りの百緡で、私は衣服を整え、冠と網巾を買い、馬を用意して、上京することにしよう」

金基淵が崇礼門の外の二番目の家を訪れると、女人は履もはかず、転ぶようにして出迎えた。けだし、基淵にはその女人がすぐにはわからなかったが、女人には基淵がすぐにわかった。二人は会うとしばらく手を握って、慟哭し、しばらくこれを怨む様子は恩人がまるで仇であるかのようであったが、豪華な御馳走を食べて、再会を祝して、まるで死んだ人が蘇生したかのようであった。

女人が話した。

「あなたにいただいた二緡の金が増えて今は二万余貫にもなりました。一万貫はあなたにお返ししますので、夫人とお子をこれで養ってください。一万貫はわたくしにこのままください。わたくしにも子がいます。これは前の夫の血で、また生かせなくてはなりません。そしてわたくしとあなたは一室に同居して、余生を楽しく過ごしたいのです。官職一つはわたくしが斡旋します」

基淵はついに荷物を始末し、家族全員を引き連れて、崇礼門の中の数軒の家を買い、鼎や食器をひもとき、落ち着いた。門外の家とはわずかに矢の届く距離であった。新夫人と旧夫人のあいだはどうであったのだろう。たがいに往来して仲睦まじかった。人びとは楊州の鶴¹⁰⁾と評判した。

伊山子¹¹⁾がいう。

「この話には恐ろしいところと、僥倖というべきところがある。寡婦となった母をだまして、家産を蕩尽し、その親を窮乏に追い込み、飢え死に至らしめようとしたのは恐ろしいところであり、死のうとする女人を生かし、まごころを示したことで、女人が財を増やし、みずからも旧に復すことができたのは僥倖というべきところである。

もし人が恩恵を受けて忘れず、強要されても結婚せず、ついに引っ越しで恩恵に報いて、円満に夫婦生活を送ったなら、どうして再嫁しても婦節を失ったといえよう。

最初の息子を育て上げ、財を分け与え、本夫のために後継ぎを絶やさなかった、これをやすやすと成し遂げたが、これはなかなかできないことだ。

世間の恩を忘れて義理に背く輩たちは、けだし、この女人を見習うべきである」

(此山筆談)

- 1) 巨余：京畿道広州郡の松坡の近くの地名。
- 2) 先達：本来は文科・武科の科挙に及第してまだ官職につかない人をいうが、普通は武科及第者をいうことが多い。
- 3) 宋近洙：?～1902 高宗のときの宰相。字は近述、号は立斎、南谷。諡号は文献。本貫は恩津。欽楽の子で、尤庵の八代の孫。1848年、文科に及第して官途につき、1882年には左議政に至り、退職した後、奉朝賀となった。風采がよく、性格も謹厚で、学問に明るかった。壬午軍乱をはじめとした複雑で困難な政局につきあたって官職を離れて閑暇な歳月を送った。
- 4) 尤庵：宋時烈の号。1607～1689 十七世紀朝鮮を代表する学者で、西人、後に老論の領袖。字は英甫。1633年、生員試に一等で合格、敬陵参奉となる。

朝鮮漢文短編小説集（I）

1635年、鳳林大君（後の孝宗）の師傅となり、翌年の丙子胡乱には王に扈從して南漢山城に逃げ、和議が成立すると、故郷に帰った。1649年、孝宗が即位すると執義となった。1651年、自己の著述に清の年号を用いなかったことが問題となって辞職し、復歸すると、孝宗とともに「北伐計画」を推進したが、孝宗の死とともに、この計画は沙汰やみになった。西人として台頭して来た南人と争って辞職や復歸を繰り返したが、1680年、庚申大黜陟で南人が失脚すると、領中枢府事となり、1683年には致仕して奉朝賀となった。後に西人は彼を首領とする老論と少論に分派した。1689年、王世子が冊封されると、これに反対して濟州島に流され、尋問を受けるために上京の途中、井邑で殺された。李栗国の学統を継いで畿湖学派の主流を成した。政局の混乱の中で多くの政敵をつくったが、多くの学者を育てもした。『宋子大全』がある。

- 5) 蔭塗：科擧の及第を経ずに父祖の功績によって官職に就くこと。
- 6) 新延の下人：中央から赴任して来る官僚を迎えるためにソウルまで来る地方の下級官僚をいう。
- 7) 慶州の首尊：首尊は地方の役人を敬ってということば。ここでは新たに赴任する守令を迎えるために慶州からやってきた下級官僚、つまり（5）の「新延の下人」と同一人物になる。
- 8) 支杖錢：新たな守令を迎えるために要する費用をいう。
- 9) 後垢：武弁が着る、活動しやすいように後が分かれるようになった服をいう。
- 10) 揚州の鶴：昔、多くの人びとが集まってそれぞれがその志をいった、ある人は揚州刺使になろうといい、ある人は多く財貨を得ようといい、ある人は鶴に乗って上昇しようといったが、そのとき、他の一人が、腰に十万貫をまとい、鶴に乗って、揚州に行こうといったという故事から。多くの欲望を合わせて満たすことの喩え。
- 11) 伊山子：「伊山」は「此山」であり、『此山筆談』の著者自身。此山を号とする人に裴嬖という人物がいる。『歴史人物事典』によると、「生没年は1845～？

書画家。本貫は金海。故郷の金海に隠居した。山水、器皿折枝、四君子をよく描き、書は自由奔放な筆致で絵画性を感じさせ、董其昌体をよく書いたという。遺された書を見ると、当時流行した秋史体の影響も見える」とあって、その著書については触れていない。

八、三難を克服した趙氏

趙三難というのは忠清道の名家の息子であったが、その家は貧しく、幼いときに父母を亡くして、結婚することができなかった。

その兄の某は文章をよくし、世事に疎く、みずから生計をはかることもできなかったが、飢えを糠で腹を満たすことができれば、富者の家で肉を食べているのと同じだと考えていた。

三難は三十歳になった、その兄は友人たちの助けを借りて、采緞（新郎から新婦に送るチマ・チョゴリ用の織物）を用意し、たがいに釣り合った婚家を探して結婚させることにした。すると、やはり、貧しい者が貧しい者と結婚することになった。

新婦がやって来た日に、甕の中に一粒の粟も残っていない。台所から煙の立てようもない。

新婦がいった。

「家産がこのようでは、どうやって生きていくというのですか」

「わたしに一つの考えがあるのですか、あなたはこれに従われますか」

「死んでも仕方がないと状況で、生きるすべがあれば、どうしてそれを拒みましょう」

「貧しくて食事もできず、餓え死にしようというときに、この采緞は意味がありません。まずこれを売れば、三十緡にはなるだろう。そして、あなたと遠くに行って、大路に沿って小家を買う。そこで酒食を売って、利益を得れば、金を貸してさらに増やし、家を広げて内房を立派に造り、酒

旗を立てて、酒店とする。客室をつくり、それに接して厩も作り、行き交う商人たちを泊めることにしよう。私は旅館を差配し、あなたは酒店の女将となり、二人で力を合わせて十年、財産を築いて、昔の家門を復活させようと思うのだが、どうであろうか」

「いうは易く、為すのは難しいことですよ」

「難しくなければ、どうしてた易いことがあるのか」

「それなら、そうしましょう」

ついに采緞を売って、二人は荷を背負い、夜逃げをした。

その兄は家が貧しいために、弟が堪えられなくなり、このように家門に泥を塗ったのだと考えた。書物を読む気にもなれず、人に顔を合わせる面目もなかった。

それから五、六年が経つあいだに、兄の生計はいよいよ困窮して、餓えが顔色にも現れ、全身がすすけ、冠も破れ、履もはかず、その姿はもう乞食と変わりがなかった。妻子とともにかつがつ生きているだけのことであった。

兄は弟の行方を探そうと、八方あまねく歩きまわり、苦勞しながら、全州の万馬関にたどり着いた。関内に大きな酒店があり、一人の美人が店に出ている。杖を立て、目を凝らして、これを見ると、弟の嫁のように見える。あるいは別人かもしれないと、その挙措をしばらく見ていると、まちがいでなく、弟の嫁である。彼は喟然としてため息をつき、酒旗をくぐるようにして入って行った。

「チェスや、いったいここで何をしてるんだ」

「義兄さん、こちらにどうして来られたのですか」

「わたしは歩き疲れて咽喉がかわいた。まずは咽喉をうるおすために一杯もらおうか」

といて、出された一杯を呑んで、

「弟はどこにいるのか」

「商いのために近くの市場に行っています」

「わたしは弟に会うためにやって来たのだ。帰るのを待って、会うことができれば、一晩泊まって、それから帰ろうと思う」

「それなら。裏の部屋でおやすみください」

しばらくすると、弟が短いペジャを着て、行商たちの荷駄数十頭ばかりと続々と入って来た。荷物を解き、馬をつないで秣をかき、舞い上がる埃をかぶって、酔い狂った人のようなのである。兄は部屋から弟のその姿を見て、落ち着くのを待って、弟を呼んだ。

「弟や、これはいったいどういうありさまだ」

弟が目を上げて見ると、兄がいる。腰を落として前庭で拝礼をして、

「お兄さんは、どうしてここにいらっしゃったのですか」

と尋ねただけで、一家のこと、路程のことを尋ねることはなく、また久闊を叙して懐かしがるということもなかった。旅館の客たちに食事を用意してもてなし、出たり入ったりして、従容としている暇がない。しばらくして、

「お兄さんも他の旅客といっしょにお食べになりますか」

「それはどういう意味だ。あれば、勿論、食べようではないか」

「往來の客たちは十文ですが、兄さんには五文で差し上げます」

その兄を冷遇することがはなはだしいのを知っても、耐え忍んで、一晩泊まった。弟は夜も別の部屋に寝て、兄のところにはやって来なかった。

翌朝、行商たちはみな旅立って行ったが、その兄は立ち去るに忍びず、行こうとして行かず、ぐずぐずしている。弟が、

「お兄さんはどうしてぐずぐずして出て行かれないのですか。早く出ないと、部屋代が生じてしまいますよ」

「わたしは長いあいだお前を見ずに、心配で仕方がなかったのだ。いま、お前にやっと会うことができ、なかなか出発することができないのだ。

お前はこの兄がそんなに憎くて、はやく行かせたいのか。食事の代をとるなど、どういうことだ」

「われわれ兄弟の間がらを考えれば、これが当然ではありすまいか」

「それなら、いくらだというのだ」

「わたしは兄さんの錢囊にたんまり入っていないのはわかっています。朝夕の二回の食事で、合わせて十文をいただきます」

「お前はたんまり入っていないというが、まったく空っぽだというのは知らなかったな」

「それなら、どうして富者の家に宿泊を乞わず、ことさら酒店に入って来られたのですか。もしお金がないのなら、袖の中にある何かを代わりにいただけませんか」

「それもまことに難しいことだ」

「それが難しいなら、なにか簡単なことがありますか」

兄はそこで、破れた扇と汚れた手巾とをさし出した。すると、弟の嫁が横から出て来ていった。

「昨日の最初の一杯の酒の分も払ってくださいな」

兄は囊の中から折れた櫛を取り出して、それを投げつけ、涙を流しながら、帰って行った。その後、心は鬱々として晴れず、ため息をついて、つぶやいたものだった。

「交址・広東の貪泉、秣陵の辱井というのは、このようなことをいうのだろう。わが家にこのような背徳の弟が出て来ようとは考えもしなかった」

そうして、子どもたちを教戒して、生業に励んで、この屈辱を晴らそうとした。四、五年のあいだ、寒さ、暑さを恨みながら、歳月を送った。

ある日、駿馬にまたがり、皮衣を着た客人が門前に現れた。その兄は初めはいったいどこから来た貴人なのかわからなかった。部屋の中に入って来て、うやうやしく挨拶をした後、もじもじしているのを見ると、実は弟

なのだった。声を上げて叱りつけ、

「お前も人に返る日があるのか」

という、弟は話した。

「すみません、すみません。まずはわたくしのお話を聞いてください。わたくしは家を出るとき、貧苦に堪えることができず、妻と約束して、数年の計画を立てたのです。南方数百里の関市に行き、大路に沿った要地を占めて、利益を上げることにしたのですが、仲買人などがやって来るままに、客として世話をし金を得て、商いをし、品物を売って、蓄財することに没頭しているときに、どうして兄弟間の情を念頭に置くことができなんでしょう。お兄さんがいらっしゃったとき、憎たらしいような対応をしましたのは、非人道で金儲けをするために、人情というものを断って、あのように振る舞ったのです。他に意味はありません。いま、わたくしは数万金の富を築きました。某郡の某邑に土地を選んで、田を買いましたが、おおよそ二千石の収穫はありましよう。その一千石はお兄さんの田庄として差し上げ、残りの一千石はわたしの田庄にします。山の麓の東西に、それぞれ五十間の瓦屋根の家を建てました。それぞれがモムチェ、サランチェ、大庁、マル、台所、倉をひとしくそなえ、器物と衣服、書籍も同じように置いてあります。ただ大きい方には三間の祠堂も建てました。今は奴婢たちが留守番をしています。

ここに二つの櫃に入った文書、朝と夕の精白米、そしておかずを若干用意して参りました。お願いですから、お兄さんは、櫃の中の文書を見て、この弟とはいえない所行をした弟を容赦してください。明日、夜が明ければ、この古くなった家と使いようのない家具を棄て、身一つであちらに移っていただき、富家の翁となっただけならば、幸々甚々というものです」

兄は弟のお話を聞いて、これまでの怒りが笑いに転じ、二人のあいだはなごんで、燈火をはさんで座り、素懐を述べ合ったのだった。兄が、

「家が貧しいので、財を築こうというのは、もちろん称えるべきことだが、わが家のような両班の家系ではなすすべもない。これはどうしたらいいだろう」

といて、一方では慰勞しながら、一方では胸を痛めてもいる。

その翌日、駕籠を引き、馬を借りて、古びて汚れたものを棄てて、蓄えたものと伝わっている文書だけを集めて、弟が前に、兄が後ろになって、一家が引越すことになった。家の留守をしていた奴婢たちが日数を数えて、盛大に飲食を用意して待ち迎えた。

その兄は二つの家を見て回り、その規模の大きさを褒めたたえた。弟が計画していたままに、それぞれ居所を定めて、世の人のもつ悩みを忘れ、火で調理した食事をする神仙となった。

弟は兄と相談して、賓客を迎えて宴をもうけた。数日、飽きるほどに飲み食いして、弟がため息をついて、客たちの前でいった。

「わたくしはこれで満足して終わったら、ただの小錢を稼いだ男というのに止まります。いまから家事を顧みることなく、四書五経を読んで、明経科に及第して、わが身の傷を洗い流そうとおもいますがいかがでしょうか」

客たちがみな、

「すでに富者だが、また貴者にもなろうというのか。それははなはだ難しいことですよ」

といったが、

「たとえ難しくとも、やり遂げないでいられましょうか」

といい、物事の処理に長けた人を選んで、大小の小作地の官吏を任せ、出納のこと、賓客の接待など、すべての処理を任せることにした。そして、経書を風呂敷に包んで山寺に籠もり、静寂な上の僧坊で昼夜に読書に没頭した。

五年のあいだに七書に通じて、音読して滞ることなく、その意味も理解した。式年試を受けて三十三人の及第者の一人となり、名前が紅牌に記され、王から黄封された酒を下された。御賜の花を家の門に飾り、その家は栄華に包まれた。

六品の官職について、司憲府・司諫院を経て、弘文館校理に至った。

世間では彼を趙三難と呼んだ。けだし、士大夫の心操として、夫人とともに酒店を開くことがまず第一の困難である。長く会わなかった兄が訪ねて来たのに、その兄から代金を受け取ろうとするのが第二の困難である。富者となって、その家の産業を顧みることもなく読書に没頭するのが第三の困難である。

趙三難は英祖の時代の人である。子孫は今に至るまで富貴であり、官職に就く者も絶えないという。

(此山筆談)